
風の聖痕 秘伝 隠された血脈（業火の炎と風と地の少年）

将真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の聖痕 秘伝 隠された血脈（業火の炎と風と地の少年）

【Nコード】

N3462R

【作者名】

将真

【あらすじ】

神風一族それは炎の精霊に愛された一族 世界最強の炎術士である。

その宗家に生まれながら卑しき血を継ぐものとして、存在を隠された一人の少年がいた。
その少年が風の少年と地の少年に出会いし時、平穏だった島に謎の術士の襲撃が 起こり戦乱の火ぶたが切られるのだった

風の聖痕の二次小説です。

前回の作品は自分でもわけがわからなくなったので、話も構成も全部一から組み直し再構成しました。なお引き続き華なた霞氏のサタンオブブラックファイヤーとクロスさせていただいております。霞氏のサタンオブブラックファイヤーも 宜しくお願いします。

序章 悪夢（前書き）

というわけで改良版スタートです
改良版に伴い主人公は前回の一人から三人になりました

序章 悪夢

（全てを焼き尽くす あの娘を殺したあいつらを、跡形もなく
塵一つ残らず消滅させてやる、それを邪魔する者は敵だ、敵は殺す

俺は探した憎いあいつらを殺すために だがあいつらは見つ
かない、どこだ どこにいる

「出てこいあの娘を殺したお前らは絶対に許さない」

俺は怒りの感情むき出しに叫んだ

そこへ招かざる客がやって来る

「いたぞ」

「もうすぐ当主が増援を連れてくるそれまでは食い止めるんだ」

（違うお前じゃない）

俺の叫びに答えたの

は俺が殺したい奴らじゃなかったもう何人目だろうか、
俺の敵討ちの邪魔をするうざったい奴ら

「どけ！！ お前らに用はない」

そう言っ て俺は警告する

だがそいつらは聞かない。

それどころか皆念じるように手を組みだす、
するとその手から
炎が現れる

「こちらは5人だ

同時に仕掛ける

殺す訳にはいかんが 怪我させるぐらいは やむを得んだろう」

四十代半ばぐらいの 厳つい男が他の仲間たちを見まわしながら
言う

それに残りの4人が一斉に頷くと同時に俺の周りをぐるりと囲
む。

たちまち俺は包囲された

「よいしまだやれー」

最初に命令を下した 厳つい男が再び命令を下すと同時に、全員が
手のひらにある炎を一斉に俺目掛けて投げつけてきた

炎は炎弾となり、俺目掛けて飛んでくる

「無駄だ」

二、三十個程あった 炎の弾丸に対し俺は、片手に奴らと同じく
炎を生み出すと、その炎を自分に迫りくる 炎弾にぶつけた

俺の放った一つの炎弾が無数に 飛んでくる敵の炎弾を接触した瞬間に音も出さずに消滅させた

「馬鹿な5人がかりだぞ幾ら才能があると言っても、11歳の子供だぞ」

「くそもう一度だ」

自分たちの攻撃をあっさり、防がれた5人の術者は一人一人動揺し驚愕する

そこへ炎弾を跡形もなく消滅させた俺の炎が威力を衰えさせる事もなくそのまま 突き進み奴らの足元に着弾した

ドーンと爆音が響き

地面が碎ける

「うわー」

「熱い」

「逃げろー」

術者たちは一人一人 口々にわめいて、瞬く間に逃げていった

「あいつらはどこだ」

俺は無様に逃げていった敵には目もくれず、仇であるあいつらを

探す

しばらく歩きまわっていると突如前方に一人の男が立ちふさがる

立ちふさがったのは自分より年上の十代後半の若い男

メガネをかけたその奥の眼光は鋭く、

右手に刀を持っている

「業火^{いっか}そこまでだ」

目の前の男が俺の名を呼ぶ 火我業火 それが俺の名だ

「お前も邪魔するのか！ あいつらを何故庇う」

俺は鋭い目つきで睨みながら目の前の敵に言う

「あの二人を見つけてどうするつもりだ」

「跡形もなく消滅させる。

あの娘の仇を取るんだ」

俺はそう言いながら 全身から炎を立ち上らせた

これは警告だこれ以上立ちふさがるなら 排除するという意味
の

「口で言っても無駄か」

敵も俺の意思が解ったらしい。
言葉は不要とばかりに刀を中段に構える

「はぁー」

構えた後気合いを放つと持っている刀の刀身に炎が宿り
その炎は黄金の色に輝やく

その美しい炎を見た俺は右拳を強く握って念じる
すると俺の右手にも炎が生まれる。

それを見た敵は一瞬驚愕の表情をするが
すぐに気を取り直し
もとの真剣な表情に戻る

「血筋が血筋だ可能であってもおかしくはない。

しかしこの領域にこの年で達するとは
宗家の次期宗主でも16歳でやっただったというのに」

敵がよくわからない一人言を言っている。

気になったが、排除をするのが大事なので、そのまま拳に炎を纏
ったまま一直線に突っ込んで行く

「やるしかないか」敵は俺が突っ込んでくると腹を括っ
たらしい

決断すると早い

すぐに刀を大上段に構えると

「たぁー」

と声をはりあげながら躊躇することなく俺の頭目掛けて刀を振り下ろした

唸りを上げながら、黄金の炎を纏った刀は俺の頭上に降ってくる

「邪魔だ」

それを俺は周りをブンブン飛び回るハエを手で払うように、刀を手で払った

ジュツと俺の手が刀に触れた瞬間刀は柄だけ残して消滅する溶けたのでなく 消滅する

「これが○家の力か」

柄だけ残った刀を呆然と見ながら震えている敵に、すかさず俺は顔面にパンチを見舞って黙らせた

「あいつらはどこだ」

俺は殴り倒した地面に転がっている敵をちらっと見る
ぴくともしない

俺は敵が倒れているのを確認すると、再び探索に戻ろうとした、その時

「なるほど確かに
これじゃあ神風の分家じゃあ荷が重すぎるな」

空から声が降ってきた

「誰だ」

俺が声の聞こえてきた方を、慌てて見るとそこには翼を生やした人間がいた

いや違うよく見ると翼は炎で出来ている
炎の翼を生やしているその人間は、地上から約十メートルの所に
浮遊しており男か女かは判別出来ない

「お前を止めるように頼まれたんだ。
最初は氷雨さんに依頼が来たんだが、状況を聞いてかなりヤバい
と思ったんで 俺が来た」

俺の声が聞こえていたようで、空から答えが返ってくる

「俺を止めるだと」

俺は上空にいる男を 敵と判断し、再び炎を全身から立ち上らせる。
る。

ありとあらゆるものを消滅させる灰色の炎を

それを見た上空の人間はびっくりしたように一瞬俺の炎をじっと
見つめるがすぐに笑みを浮かべる

「それがお前の聖炎か

聖炎使いとやり合うのは当主以来だな

聖炎使い相手なら出

し惜しみはなしでいくか」

そう上空の人間は言　った後、その体から　凄まじい魔力がほと
ばしる。

次に背中の炎の翼が黒い色に変わり、その翼が体を包むとやがて包
んだ翼が炎に变じ黒い炎の火柱が上がる天をも貫くと思われるほど
の巨大な火柱の中に人影が写り、ゆっくりと宙を移動してその中か
ら出てきたのは、漆黒の長い髪を靡かせた妖艶な女だった

女が出てきた後の火柱は再び女の背中に集まり黒き炎の翼となる

「準備完了だ。

この状態になった以上あまり手加減は出来ないぞ。

一応死なないように加減はするがな　」

黒き炎の翼を纏った女は、俺に注意をした後すぐに翼を使って空中
で一回転するとそのまま俺目掛けて急降下してきた

「お前も邪魔するなら敵だ」

俺は急降下してくる妖艶な女を敵と決めると迎え撃つため、体から
立ち上っている灰色の炎を口に集めだす、間もなく光線として発射
出来るだけの精霊を集めた俺はその巨大なエネルギーを黒い炎を纏
う女に、狙いを定めて発射しようとするが

いつの間にか黒い炎を纏う女の姿は無くなっていた

「消えた? ……がっ」

消えた女を目で見ながら探していた俺の体を突然激痛が襲った

「何だこれは」

その原因は間もなくわかった。

知らないうちに胸に十文字の傷が付いていたからだった

激痛はその傷口からきている。

さらにその傷口から 今度は黒い炎が吹き出し、たちまち俺の全身を焼く

「ぐわぁー」

俺は自分の灰色の炎を体を焼く炎にぶつけて相殺させようとするが、間もなく意識が朦朧としてきて足元がふらつき、片膝がついてしまう。

それでも黒き炎は消える事なく俺の全身を燃やし続けやがて 俺の意識を刈り取り 闇へと誘う。

薄れゆく意識の中で 最後に見えた景色は 黒き炎を体に纏い、両手に黒い炎の剣を持って悠然と立つ美しい妖艶な炎術士の姿だった

序章 悪夢（後書き）

いかがだったでしょうかタイトル通り

夢なので、敵の正体とかなどは曖昧になってます

未熟者なのでアドバイスや感想はとても嬉しいです

良い作品にしたいと 思ってますので皆様の知恵をお貸し頂けると幸いです。

読んで頂きありがとうございました？

第一章 (炎の少年の一家団欒?) (前書き)

最新話投稿です

前回シリアスだったので今回はコメディーになっています

第一章 （炎の少年の一家団欒？）

「うわぁー」

ガバツと布団を跳ね上げた少年が大きな声を上げて眠りから覚めた

「はぁはぁ……夢か」

夢から覚めた少年 火我業火は首もとを手でぬぐいながら起き出す

「これで見るのは三回目かいいつも自分が 焼かれるところで目が覚める。

タチの悪い悪夢だ」

そう言った後業火は 先ほどまで自分が 寝ていた布団を片付けた後パジャマを脱ぎ着替えたす

そこにノックの音が聞こえる

コンコンとゆっくり二回ノックした人物が中にいる業火に声をかける

「どうした朝っぱらから騒がしいぞ
何かあったのか」

心配そうな声でその人物が話しかけてくる

業火はそれに着替えながら答える

「何でもない。

ちよつと変な夢を見てびっくりしただけだよ兄……貴」

外からノックした人物に業火は兄貴と呼びかけ心配ないと言うのだが、どこかよそよそしい言い方だ。

「……そうか大丈夫　ならいい朝食の準備ができた。
早く下りてくるんだぞ」

業火の返事に淡々と　答え用件だけ言うと、ドアから離れて階段を下りて行った

「目覚めが悪い分　飯で多めにエネルギー補給するか」

業火はそう言って　着替え終わった後　自分の部屋から出て　行くのだった

三階の自分の部屋から一階の部屋まで　業火が下りて食堂に着くと自分以外の家族はすでに勢揃いして席に座っていた

業火は自分の指定席である、一番左端の席に慌てて座る

「おはようございます」

座った後業火は、 一番奥の席に座る 五十代の頑健そうな男に朝の挨拶をする

「おはよう」

男は業火に一言挨拶すると、食卓に並ぶ 膳に目を写す

業火は挨拶し終える と食卓に座る者たち を順々に見る

一人は二十代前半の メガネを掛けた一見優等生のような感じに見える男、先ほど業火が兄貴と呼んだ男である

もう一人は笑みを浮かべて業火を見る老人年は八十ぐらいか
着物をゆったりと着て新聞を読んでいる
そして業火が朝の挨拶をした五十代の男 男ばかり4人の食卓だ

「業火はどうした眠そうな顔をしているが女でも連れ込んでいるのか？」

と新聞を読んでいた 老人が業火に話しかけてくる

老人の名は火我道雅 (ひがみちまさ)

今年八十歳になった 業火の祖父である

身長160と小柄な体をしている目が年の割に見えるようで、新聞

の細かい字を裸眼ですらすら読んでいる

「はぁー朝っぱから　ボケてんのかいや色ボケてんのかジジイ」

そんな祖父の軽い冗談に業火は吐き捨てるように辛辣な言葉を放つ。

直後部屋の温度が急上昇したのを業火は肌で感じた

（これは火の精霊が　活性化してるのか）

業火が発信源を特定するとそこには立ち上がり、両手に炎の玉を持った壮年の男がいた
この男の名は火我剛　主^{ひがしろうしゅ}　年齢55歳　業火の父で火我家の当主である

「おじいちゃんに対しその口の聞き方は　何だー」

言い終わると同時に　剛主の持つ火の玉が　手のひらから飛んでくる

ゴォーと勢いよく飛んできた火の玉は食卓に着弾し爆風と炎が食卓を包むまで数秒とかからなかった

「おまえアホだろ」

と業火が父に突っ込んでいたが、炎のはぜる音にかき消され　業

火以外には聞こえなかった。

食卓が火の海になった業火は寝不足の上　朝飯抜きで登校する
はめになったのだった

キンーコーンカーンコーン

「はぁーまだ三時間めが終わったばかりかよ、早く4時間目になれってのくそつたれが」

三時間め終了のチャイムを聞いた業火は　机に突っ伏しながら
上目遣いで時計を憎しみに満ちた目で見上げた

朝食抜きで自分が通う龍野中学校に登校した業火は空腹の限界
に達していた

エネルギー補給まで　無駄な体力が使えない業火は授業中は睡眠
をとりひたすら体力消費を抑えたしかし悲しいかな、鍛え抜いた過
敏な感覚が　働きチャイムの音が　聞こえると起きてしまうのだ
憎々しげに時計を見るのはこれで二度目である

「おいおい朝から居眠りぶっこいてその上早く時間過ぎろって、
我がままにもほどがあるだろう。

全く金持ちのボンボンって奴は、まあこの学校はお前んちが
出資してるんだから

やりたい放題か」

そう言ってクラスメートの秋山良治

（あきやまりようじ）が話しかけて来て業火の机に片手を付く

秋山は身長140の業火に対し身長168と中 一にしては大きな体をしているスポーツも野球部に所属して 毎日汗をかい
るので日焼けで肌は真っ黒だ

だが遅生まれなの で業火より一つしたの12歳だ、業火に話しかけてくる数少ない友人の一人である

「正確に言うとうち じゃなく家の本家が 出資してんだよ
幾つかある一族御用達の学校だよここは」

机に突っ伏しながら 友人の顔をも見ずに 業火は答える

「ふうんそれにしても幾つも学校に出資 ってお前んちの本家
って凄いんだな」

「一応一千年の歴史 を持つ旧家だからな 政財界にも顔が聞
く」

業火は気だるげな感じのまま言う

「なるほどね。

ところで朝から元気ないけどどした？」

秋山が机に突っ伏す

業火を覗き込みながら言う

「寄るな暑苦しい
って ないからだよ」

大した事じゃない

寝不足と朝飯食

業火がうんざりした

調子で言う

「朝食食ってないって寝坊したのか？
でも寝坊で寝不足だと変だよな、寝過ぎるから寝坊するんだし」

秋山が首を傾げる

「朝っぱらからちよつと一騒動あったんだよ、とにかく四時間目
終了まで俺は寝る。 昼飯は出前が届くからそれまで起こすなよ」

業火はそう言った後 うつぶせのままシッシシと手を振って

秋山を追い払う

「はいはい、邪魔者は退散しますよ お休み」

秋山はそう言いながら、自分の席に戻って行った

（五十も過ぎた親父が朝っぱらから、ブチ切れて食卓火の海にしましたなんて言えるか、養父とはいえあれが親父だと思うと情けないぜまあ 実父よりはマシか）

業火は心の中でそう思った後、眠りにつくのだった

第一章 (炎の少年の一家団欒?) (後書き)

いかがだったでしょうか。

コメディー難しいです 感想や意見などは 随時受け付けてます
ので奇特な方待ってまーす

第二章 (学校生活と 風の来襲) (前書き)

更新しました 良かったら見ていって下さい

第二章（学校生活と 風の来襲）

「はあゝ生き返った」

待ちに待った昼休憩 ついに業火は空腹を 癒やす昼飯にありついていた。

メニューは天津飯大盛りに餃子五人前これを業火はあつという間に食べ終わった。

まさにやせの大食いである

「ごちそうさま」

昼飯を食い終わった 業火は、食後の片付けもすぐに終わらした

「相変わらず凄い喰いっぷりだな」

業火が食い終わったのを待っていたかの ように、秋山が業火の席にやってくる。 秋山は弁当を家から 持ってきており、早食いの彼はすでに食べ終わったみたいだ

「今日はたまたまだよ。」

朝飯抜きだったからな」

大食いと思われるのが嫌な業火は、朝食べてないからと言いつける。

「そうか？　いつも

と大して変わらない量だと思うが」

「育ちざかりだ仕方ないだろ」

友人の追及に白旗を　上げ業火は開き直る

「まあ俺も人の事は　言えないか」

あまりからかつては　悪いと思ったのか、　秋山は話題を変える

「ところで業火

近頃妙だぞ、授業も集中出来なくて上の空だし、授業中の居眠り
も多いだろう

疲れてんのか、退魔　の仕事がハードなのか」

秋山は退魔と言うところから声を小さくして業火の耳元に囁く

秋山は学校内で唯一　業火の家業を知って　いる友人だというよ
り、業火に学校の友人は秋山しかいないのだが

業火は退魔や封印

除霊などを家業とする炎術士の名家神風　一族の分家火我家の
三男だ

神風一族とは火炎を自在に操る『炎術師』　の中でも最強と目さ
れる一族である

単に力が強大なだけではない。

一族の血に宿る特殊 能力にこそその由縁があった。彼らの操る炎は単に分子運動を加速させることで 生じる物理現象ではなく、不浄を焼き清める破邪の秘力を有しているのだ。

この『浄化の炎』 により、神風の術者 は妖魔邪霊あらゆる 法に背く存在に対して絶対的な優位に立つことができる。

この浄化の炎の力を 神風以外に持つのは 世界はともかく国内には黒野家だけである。

また神風は政財界に も強力な影響を持つ ため秋山が言った金持ちのボンボン発言はあながち間違いではない

ただ業火の家である 火我家は結構特殊な 家であり、神風初代宗主の頃からこの龍苑島りゅうえんとうという名のこの 島に永住するように言われ以来一千年の 長きに渡ってもそれは変わることなく続いている。なお神風には後もう一つ加倉島かくらとうという神風家が術者の訓練を行うために使う無人島で実は業火の火我家と同じ島にある分家の神島家が一年交代で管理をしている もある

「いや退魔や除霊の 方は上手くいってる 俺は大抵兄貴や親父らの手伝いでいくからな。

兄貴や親父たちは強すぎるから、はつきり言って俺がする事なんてない。

退魔って言ったらお前の方がしんどいんじゃないのか？」

業火は自分を心配し てくれる友に感謝しつつ、秋山の方を心配する

秋山も退魔師だ。それが元でお互いに理解し合え仲が進展し今では親友と言って差し支えない仲である

ただ業火みたいに一族全て退魔師と言うわけではない

秋山だけが退魔師なのだ。

元々は秋山家は代々の退魔師の一族だった。

だが祖父の代のおり娘しかなかったし　娘たちも霊力がなく　妖魔や邪霊が見えなかったため、祖父はあえて退魔の技を伝えなかった

だが祖父は家業を途絶えさせる事が忍びなく才能を見いだした孫たちに退魔の技を伝授しようとしたが、候補三人のうち二人が両親からの反対で脱落。たった一人残った良治が退魔　業を継いだのだからなみに祖父は良治が初めての退魔仕事を終えた後亡くなっているため、秋山家ただ一人の退魔師なのだ良治は

「いやそんな事はないぞ。

退魔もたまに島外で　やるぐらいかな島内　はお前たち神風一族がいるから俺に出番　なんてない。

島内でやったのは　1ヶ月前だったな　風牙衆の風祭家たち　の手伝いでな」

島内はとある事情から妖魔や妖怪などが　外に比べて多いそのため風術師と炎術師　の2つを揃えられない時もありその場合は風牙衆だけで退魔　を行う場合もある

「風牙衆の手伝いか　風祭って言えば　神島家に従事して　たな、腕前はどんなんだ？」

業火は気になって 秋山に聞く

「俺が組んだのは 風祭家の後継ぎ風祭 爽太（かざまつり
そうた）だったんだが、強かったな俺何もしないで良かった
っていうか立ってる だけだった」

ほうと業火は感心する

「お前が強いって 言うんだからかなり の腕前だな」

業火は顔も知らない 風祭爽太を思い浮かべる

（風牙衆で腕利き って事はスピードとか早いのか後は接近
戦が得意なのか、探索も得意かも知れないな）

宗家から離れて辺境 を守るため火我家は あの手この手を使っ
てきたため神風一族の炎術至上主義とい う思考は持ち合わせて
いない。まあこの斬新な考えが神島家との軋轢を 生んでいるが
火我家は気にしていない

「まあ確かに強いんだが、何て言ったらいいのかあれは」

業火の問いに何故か 秋山は齒切れの悪い 答えを返す

それに業火はイライラする

「何だ？ 強くない のか」

「強い事は間違い ないんだが」

「何だ勿体ぶらずに 早くいえ！」

業火は思わず声を 荒げる

その大きな声に業火たちの方を、他のクラスメートが見るが、業火は気にしない

業火に詰め寄られた 秋山は答える

「一言で言うとなぜ 風術師かな」

「はあどういう意味 だ？」

業火がさらに聞こう とすると、昼休憩の 終わりを告げる予鈴が 無情にも鳴った

「しょうがねえまた 後で聞くわ」

次の授業は体育なの　で業火は話をきり
着替えだすのだった

「だから他に表現　のしょうがないんだよ。
風術師なんだけど風術師っぽくないって　感じ」

放課後の帰り道

業火の質問にうんざりしながら秋山は答えた

学校が終わった二人　は一緒の方向なので　いつも二人で帰る

「風術術師っぽく
ない風術師ね
変わった奴だな」

業火は秋山の説明に　納得して話題を変える

「ところで島外の
仕事ってのは一体
何をやるんだ？」

「島の外でやる仕事　かあ？」

話題が変わったので　秋山はほっとしながら答える

「基本的には名のある一族の分家のお手伝いだな。

神風に並ぶと言われてる炎術師の大家黒野家とかあるいは水の船津より劣るとは　　言え六百年という歴史を持つ深水家とか　　などれも家柄を誇った嫌な奴らだったぜ　　」

「大変なんだな」

業火は知らない者たちとそのつど組まねばならない秋山に同情する

「もうなれた」

二人は会話を続け　　ながら帰り道を進んだ

五分程歩いただろうか。

妙な違和感を業火は　　感じ、秋山の方に目配せする

秋山はそれに真剣な　　表情で答え辺りに
それとなく視線を送る

「静かだな人が見当たらないどころか、　　野良犬、野良猫も見
かけないな」

「通学路だぞ夕方　　に人気がないなんて　　あり得ないぞ」

業火も秋山と同じく 周りを注意してうかがう
だから気づいた
密かに隠れている
人物に

「業火、風の精霊が 辺りにかなり多い
これは風術による
隔離結界だと思う」

秋山は業火に険しい 顔をしながら情報を 伝える

「風術師の仕業か 　　って事はまた神島の 連中が裏で意図引
いてんのか！」

業火はそう言いながら左手に火球を作り出すと見つけた人影
めがけてサイドスローで投げつける

業火の先制攻撃を見ながら秋山も戦闘準備に入る。

秋山は目を瞑り気合いを入れる

「ふん！」

背を丸めながら両拳を握りしめ秋山はふん ふーんと連続で気合
いを入れ続ける

すると秋山の身体からもう一人の秋山が 背中の中から飛び出
してきた

ドッペルゲンガー

自分の分身を一つ　　生み出す。

これが秋山が持つ異能力だ

この異能力は秋山一族の者なら誰でも
持っているがさらに　秋山にはもう一つの　力がある

「我は無敵我は最強我は天才」

秋山がそう唱え出すと、みるみる鍛えた　秋山の体がさらに筋
肉が盛り上がり、

秋山の視界が冴え渡り周囲がゆっくり見えるようになる

同様な効果がもう一人の秋山にも得られる

自己暗示による潜在　能力の引き出し

分身体との感覚共有

これが退魔師秋山良治だ

「すげえのは認めるが、時間かかりすぎだろ」

業火は変身ヒーローみたいは無駄に時間を使う友にきついツツコ
ミを入れつつ、　自身が放った火球を　追って移動する

ゴォー

突如その出鼻をくじくかのように強烈な 風が業火を襲う

「くっ」

とつさに業火は両腕に炎を纏い、その場でガードする

「ドーンと重い重圧が 業火にのしかかる

「なんて重い風だ」

業火は歯を食いしばりながら、風の一撃をその場で踏みとどま
て耐えた

「ほう？ 不意についてやったのに、耐えやがったか。
さすがは火我一族血筋自慢の馬鹿共とは違うってわけか」

何とか防御して凌いだ業火に馬鹿にしたような嘲る声が入っ
てきた

「誰だ！」

業火は怒気を込めて 声の方に叫ぶ

そこには14歳ぐらいのいかにも血の気の荒そうな目をギラギラ
させ犬歯が異常に 発達し伸びている少年がいた

業火と同じ制服を 着ているが業火に は見覚えのない

顔だった

業火がその謎の少年を睨みつけている間に業火が攻撃され制御から外れた火球を あっさりと避けた

もう一人の敵が高速で秋山のもとに駆けていく

「させるか」

両腕に纏っていた炎 を駆ける敵めがけて投げつけるが

ゴオツと耳障りな うるさい音が鳴ったかと思うと業火の炎はかき消されてしまった

もう一人の犬歯を 伸ばした少年が獰猛 な笑みを浮かべる

業火が炎を放った後 風を生み出し、業火の炎弾に叩きつけて相殺したのだ

その事実には業火は 驚愕する

（馬鹿な真っ向から 風術で炎術を相殺しただと！ 他の風術師はどうかしらんが 力の源を失った 風牙衆に出来る芸当 じゃないぞ）

業火の動揺を知ったのか犬歯を伸ばした少年はひじょうに嬉しそうな笑みを浮かべる

してやったりとその 笑みが言っている

「どうした。」

そんなにショックだったか？ ご自慢の

炎が非力な風に負けたのがよ

パワー馬鹿がパワー負けしたら当然か！ あははっうあははっ

」

犬歯をむき出しにして少年は馬鹿笑いを 続ける。

その間にもう一人の 敵は秋山の元に走っていく

「くそ！ 良治俺が 行くまで何とか凌げよ」

業火は秋山に叫んで 注意を促すと、馬鹿笑いしてる、風術師の
少年を見た

「神島の回し者か しつこい連中だぜ」

「神島？ 関係ないな家は神島家に従事 してはいるが、あい
つらに命令されては いない俺は俺個人の 意思でお前を試しに
きた」

「俺を試すだと」

業火はそう言いながら拳に炎を纏い、
ファイティングポーズをとる

左拳を顔の前にだし　　右拳は顎にひつつける

「そうさ、お前の力を試してやる火我業火、おっと名乗るのを忘れてたぜ。

俺の名は風祭爽太

（かざまつりそうた）

風祭家の後継ぎにして風牙衆最強の術師だ！！」

最後の一言を強く

強調した後、風祭爽太の体中を凄まじい

竜巻が纏い、竜巻の

周りをピカッと雷が　踊り迸る

「雷の嵐これが俺の力だ。

お前ら火我は分家では失われたはずの浄化の炎の最高位　黄金の炎が使えるんだろう？　その力を俺に見せてみろー！」

風祭爽太は雷を纏った轟風を両手を思いきり振り下ろしながら、風の刃を業火めがけて叩きつけた

異端炎術師と異質な　風術師の闘いの火蓋が切って落とされた

第二章 (学校生活と 風の来襲) (後書き)

いかがだったでしょうか

次回はバトル全開で いきます

第二章 (学校生活と 風の来襲) その2 (前書き)

最新話投稿します ?

第二章（学校生活と 風の来襲）その2

ゴォー

強烈な風が 刃となって業火を襲う

迫る風の刃を業火は背後に飛び退いてかわす

「問答無用かよ風祭ってのは随分野蛮なんだな。
だったらこっちも容赦しねえぜ」

業火は好戦的な笑みを浮かべながら大声を上げ、素早く手のひらに火球を作ると それを爽太めがけサイドスローで投げつけた

ブーンとカーブを描きながら、爽太の右こめかみを火球が襲う

「何だしょばい炎だな」

爽太は業火の攻撃を鼻で笑いつつ、余裕を見せながら風の防壁を作ろうと風の精霊を呼ぶ

瞬間

パァンと風船が割れ るような音がし、業火の放った火球が爽太のこめかみより10センチ程手前で強烈な光を放って破裂する

「くっ！」

爽太はとっさに両手で顔を覆うが、目が眩むのは避けられない

「まずい」

爽太は目を抑えながら、風の精霊に呼びかけ風の防壁を作る

ガン

爽太が風の防壁で見えない壁を作ったと同時にその防壁に衝撃が伝わる

衝撃の正体は業火の炎の拳による攻撃だ さらに攻撃は続く
業火は右を叩きつけた後すかさず左を打ち込む
左右の手による乱打が風の防壁を揺らしその振動が爽太の頬に伝わる

「くそ！ 反撃できん」

爽太は歯を食いしばりながらその攻撃に耐え続けるしかなかった

（爽太様）

風術師の少年羽川

はねかわひびき
響は横目に苦戦中の自分の主を見た

一瞬加勢に行きそうになるが、自分の主がそういうのを嫌う事を知っている颯汰は何とか踏みとどまる

（爽太様はやわな方 ではない）

響は自分にそう言い聞かせながら、目の前の事に集中する事にする

「まずは目の前の敵を片付ける」

「誰をだ？」

響の耳に誰かの声が入ってきてすぐに、
重い衝撃が響の腹を貫いた

まるでハンマーにでも殴られたような強烈な衝撃だ

「がは！」

響は口から血を吐きながら、後方にふっ飛んでいった

響の隙について、超高速のボディブローを叩きつけた秋山は鋭い
目で飛んでいった響の姿を見てから 自分の響を殴った 拳
を見てから一人 呟く

「軽かったな、わざと背後に飛んでいつてダメージを最小限
に抑えたか。

やりやがる」

秋山は上唇をぺろっと舌でなめた後ニヤリと笑い、万が一奇襲が
失敗した時の為に、後方で飛び道具 と言ってもただの 石
だがを持たせていた自分の分身に付いてこいと首をしゃくる

分身は無言で頷きその後を追った

（危なかった後少し 気づくのが遅かったら、気絶させられていたとしたら結果が 解けていた）

空中を仰向けに浮遊 しながら、響は自分の油断を恥じた

この隔離結界を作ったのは響である

爽太に破壊力では 遠く及ばない響だが 技術や制御に関して響は風牙衆最強を 名乗る爽太を上回っていた

羽川響は風祭家に仕える風術師である

元々羽川家は風祭家 の遠い遠戚にあたる だが二百年程昔に

とつくに精霊との交信能力を失い、一族から離れ一般人に成り下がっていたそんな羽川家におよそ百数十年ぶりに交信能力を取り戻したのが 響であるすでに完全なら一般人になっていた羽川家に風術師はおろか風術に関する書物もなかった響 はそれでも自身の 才を生かす道を求め 家系図を紐解き、島の存在を知るや単身 島に行った。

家系図で知った風祭家に行った響は風祭の当主に心よく迎え入れられた。

ゆえに響の風祭家に 対する忠誠心は高い だからこそ火我家の少年による戦いを挑むと言った爽太に異を唱えず無言で従ったのだ

（追ってくるか、 休ませてはくれないか）

響は地上を走って 追いかけて来る秋山を見ると、くるっと

空中で一回転し空中に立つと手のひらを広げて、秋山に狙いを定める

「今度はこちらの番だ」

響は秋山にそう告げた後、手のひらから風の刃を放った

風の刃は途中で二つから三つから五つと無数に分かれ

上空から、曲線を描きながら秋山に降り注ぐ

秋山はその風の刃たちを目を見開き凝視しながら筋肉の盛り上がった両腕を顔の前に持ってきて顔面を覆いガードする

「ぐあ」

降り注ぐ風の刃が皮膚を切り裂き鮮血が辺りに飛び散る

秋山はなすすべがなくただガードし続け急所を守しか出来ない

そんな秋山の様子を見ても、響は攻撃の手を緩めない。

今度は自分の周りに風の小さなボールを作り出す。

空気を凝縮した風の玉が十個、響の周りを漂う。

「すまんが立て込んでる一気に決めるぞ」

響は更に上空に飛んでいった後、空気弾を地上の秋山に叩きつけた

（防戦一方じゃねえか良治の奴）

業火は炎を手足に纏わせながら、苦戦する友人を見た

良治は顔面を覆いながらひたすら急所に
　　当たらないように
　　していて反撃どころではない。

このままではやられ　るのも時間の問題だ

（ああ自由に飛び回られちゃ、飛べない　　者はどうしようもないな）

業火は蹴りを風の防壁に叩きつけながら　　思考する

（それにしても堅いなもう数十発は叩き　　込んだってのにまだ
　　砕けないとは）

強固な防壁と友人の　　ピンチが業火を二重に苛立たせる

（乱打で駄目なら　　力でねじ伏せるまでだ）

業火は一気に決めようと右手一点に炎の　　精霊を集める

業火の右手に集まったら炎の精霊達は　　黄金の炎と化すが
早くけりをつけようとする業火は気づかない

黄金の炎は黄金の炎　の拳となり、業火の　　周りを熱波が包む

業火は莫大な炎の　精霊が宿ったその拳を、風の防壁に叩きつけるべく大きく振り上げた

バーン

突如爽太を守り続けた強固な風の防壁が　砕けた

業火は振り上げた拳を振り下ろす的を失い。
一瞬固まる

その隙を爽太は見逃さなかった

「隙だらけだぜ火我家」

爽太は眼前に巨大な　風の槍を作り出し　やり投げでもするかのように風の槍を掴みつつ、右手を後ろに引く

「こいつで病院送り　だ」

爽太は明らかにそんな程度では済みそうにない威力を秘めた　風の槍を槍投げの要領で思いつき前に傾きながら、後ろ足を跳ね上げてそのバネで風の槍を業火の　心臓めがけて投げつけた

投げつけた槍が雷　を迸らせながら、　業火めがけて飛んでいく

その雷風の槍を見ながら爽太は会心の笑みを浮かべた

雷風の槍が爽太の 望み通り業火の体に 直撃し雷が辺り一
帯を荒れ狂ったのはそれから僅か数秒後の 事だった

第二章 (学校生活と 風の来襲) その2 (後書き)

ご意見 ご感想いつでも待ってます

最後まで読んで頂き ありがとうございます？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3462r/>

風の聖痕 秘伝 隠された血脈（業火の炎と風と地の少年）

2011年10月6日06時12分発行